

トウンリリミス
小説リライト
「魔女と王さま」(中章)

2023/07/14



エリー

目次

1章	グリーン様の真実	1
2章	部下たちと、エンジュ	5
3章	教えるって必要なこと?	9
4章	間違えるということ	12
5章	罪を背負うということ	14
6章	いざ、再試験へ	17
7章	母の死	18
8章	精神世界での対話	20
9章	辺境へ行こう	22

1章 グリーン様の真実

物語は、すこし遡る。

それはまだ、ニニーが6つの年を迎えてすぐのころ。

エルメダーラ王国の王子様バニラが10歳、サンサーリンのクミン王女が8歳のころ。

その頃、ニニーは、箒に近寄ることすら母に禁じられていた。

「ニニー。箒には近寄らないでね」

「ママ、どうして？」

「どうしても。ママとの約束よ。お願いね？」

小さなニニーは、小さな指を、母の指とからめて約束する。でも、どうして箒に触ってはいけないのかは、分からなかった。

ニニーの祖父マグノリアは、初大魔法使いとも呼ばれ、グリー教を改革した偉大な人物だ。聖地サンサーリンで歌い続け、神の声を聞いたことは、誰もが知っている。

祖母のヤーコンは、神への返事として祭典の歌を歌った人である。

——ならば、ニニーにも、魔法の力があるのではないか。

そう、エルメダーラ王国に仕える叔父のゲウムは考えていたのだ。

そもそも、グリー教が信じられているトゥンリリミスでは、グリーンさまという宇宙生命体の体内で生きてると信じられている。

過去には「偉大な神」と一般的には信じられていたグリーンさまは、実は無力な存在だと、暴露したのがマグノリアだった。人々は、時に混乱し、時に嘆き、「自分がやる」と行動を起こしたり、偉大な神への幻想を捨てず祈り続けたりした。

「私たちの時代が来た！」

グリーンさまが無力な存在だという真実を、元から知っていた魔女と魔法使いは、そう言って、指導的な立場に就いた。

エルメダーラ王国に仕える叔父のゲウムも、その一人である。

だが、ニニーの母・ピメレアは、ニニーに魔法使いになってほしくなかった。もともと、神への返事として祭典の歌を歌ったくらいであるから、祖母のヤーコンは歌の才能

があった。母のピメレアもその才能を受け継ぎ、ニニーも同様だった。歌うのは大好きだし、自分の歌で誰かが楽しそうにしているのも好きだった。

しかし、生まれた時の先天的な才能で職業が決まってしまうエルメラダ王国において、歌手の優先順位は低い。

対して、魔女も魔法使いも、交通手段が馬しかない時代に、空を飛べるため、王族と同じような超一級の職業である。叔父のゲウムが、姪のニニーに魔女の才能があればと願ったのも仕方ないことだろう。

「ねえ、ママ。グリーンさまって、なんでもできる人なんでしょう？」

「ニニー、それは少し、違うわね」

ピメレアは、微笑みながら嗜める。まだ幼いニニーが、「神様」を「万能」だと勘違いしてしまうのは、仕方ないことだが、それは正さなくてはいけない重要な問題だ。

「たとえば私は、ニニーのママでしょう？」

「うん！」

「でもね、親になったからってすごい人になれるわけではなくて、ただの人なの。これほどまでに無力なのに、間違うと怒られる。とても辛いわ」

「うん……考えるだけで、悲しいね」

「ええ、本当にね。私は、娘であるニニーの成長に戸惑いながらも、幸あれと願い続けているわ。そしてニニーも、いつか私の小さくなった背中を見て、「頑張ってきたね！」という気持ちになってくれたら嬉しいわ」

ニニーは、大きく頷いた。

ママも一人の人間なんだ、と思うと、今まで無理をさせ過ぎたな、とも感じたのだ。「グリーンさまもそれと同じよ。ただの生き物に戻して、「万能なんて思われてつらかったね！」とねぎらうことが大事なの。そうすることで、人類は初めて大人になるのよ」「じゃあ、グリーンさまも、なんでもできるわけじゃないのね。隣にいて、ニコニコしていてくれる、みたいな。何も言わないけれど、いてくれるだけで安心するみtainな存在なのね？」

「その通りよ、ニニー。「何もしない」は悪いことじゃないの。その分、私たち人間が、「自分がやらなきゃ」「自分がやる意味がある」と思えるでしょう？」

ニニーは、なるほど、と考える。なんの権限もないけど、ただただ国民の幸せを祈ってくれるのがグリーンさま。

そう思うと、グリーンさまのためにも頑張らなきゃ、と思えたのだ。「手も口も出さない。ただ隣にいる。それがどれほど胆力のいることか。普通のひとはね、問いただしたり、先回りして解決したり、干渉したくなったりするものなの」「わかるよ！ ニニーも、つい、そうしちゃうもの」

「それをしないで、「あなたならやれる」と思って待っててくれる。無理だと思って投げてもかわらず待っててくれる。それだけでわたしたちは救われるのよ」

ニニーはこの日はじめて、「グリーンさま」を理解したような気がした。

それは完全な理解には程遠かったし、実践できるかどうかには自信がなかった。実際、ニニーはこの後、手痛い失敗をするのだ。だが、そこから回復できたのは、母とのこの問答があったからかもしれない。

そうして過ごすうちに、ある日、叔父のゲウムが家にやってきた。

「ニニー。ちょっとこっちにおいで」

「ゲウム叔父さん。どうしたの？」

「この箒にまたがってごらん」

その日、ゲウムは、小さなニニーのやることなすことを、細かく見つめていた。妹のピメレアと話をしに来たという口実だったが、実際には、ニニーをためしに来たのだ。

「だめよ！ ママと約束しているの。箒には触らない、って」

「大丈夫。いまは叔父さんしかいないから」

「でも……」

「じゃあ、叔父さんが代わりに飛んでしまおうかな。あの空の向こう、ニニーの食べたことのないお菓子を沢山食べてこよう！」

そう言って、ゲウムが箒にまたがるフリをする。

「だ、だめ！」

ニニーは、慌てて箒を奪って、足を大きく上げた。そうして箒を挟み込むと、

「ねえ、どこに、そのお菓子はあるの？」

と聞いたのだ。すでに、足は地面から浮いていた。

「……やっぱり、ニニーには魔女の才能がある」

叔父のゲウムが満足そうにうなずいた時、母のピメレアが帰って来た。

「ニニー！ どうして！」

悲鳴のような声を上げて、そのまま膝から崩れ落ちてしまった。

ニニーは驚いて、すぐに母のもとに駆け寄った。でも箒に乗っていたから、椅子や机は、なぎ倒されてしまった。

「ママ、大丈夫？」

自分が何をしたか分かっていないニニーは、困ったようにそう聞く。

「.....ママはね、ニニーに遠くに行ってほしくなくて、箒に乗らないでって言ったのに」

「ママ、ごめんなさい.....」

母のピメレアは、涙をこぼしていた。だが、ニニーの才能は見つかってしまった。叔父のゲウムは、もうニニーをあきらめることはできなかった。

ニニーが7歳になったとき、ついに、ゲウムはニニーを養女にもらい受けることにした。自分の運命を知らないニニーは、

「ママ、またね！」

とニコニコしてついていくのだった。

「ニニーは箒で飛べるもの。月に一度は帰ってきてくれるはずだわ」

母のピメレアは、そう思うことで悲しみを我慢した。

「あの子は、サンサーリン名物の甘い焼き菓子が好き.....。ニニーが帰ってくる日のために、沢山用意しておきましょう.....」

ピメレアにとっては、今は、それだけが心の支えだった。

2章 部下たちと、エンジュ

「私、ニニー！ あなたのお名前は？」

「僕……は、エンジュ」

ゲウムの家へとやって来たニニーは、開口一番にそう言った。物おじしない性格のニニーに比べて、エンジュと名乗った男の子は、内気そうな様子である。

「エンジュ。今日から、ニニーも我が家で暮らす。魔女修行をするんだ」

ゲウムの言葉に、エンジュは小さく頷いて、チラリとニニーを見た。

「じゃあ、君も、魔女になるんだね」

「いいえ。私は歌手になるの！」

「え……？」

エンジュが首をかしげて、ニニーを見つめる。

「おばあちゃんも、ママも歌手だったんだもの。おばあさまのように、私もグリーンさまに歌で話しかけて返事をしていただきたいの。本当にグリーンさまが存在するのか知りたいんですもの！」

「でも……。無理だよ。魔女や魔法使いのほうが、位が高いもの。魔女になれって言われちゃうよ」

「そんなことないわ。ねえ、ゲウム叔父様！」

二人の少年少女はゲウムを見たが、ゲウムは、小さく「今日は早く寝なさい。疲れているだろうから」というだけだった。

ニニーはようやく、ゲウムのもとに来たのは楽しい遠足ではないことを理解したのだ。

「でも、きっと歌手にもなれるはず！ がんばらなきゃ！」

自分に与えられた部屋に入って、ニニーはそう決意するのだった。

魔女の修行、といっても、地味なものだ。

まずは、最初の課題の蒸留水づくりだ。不純物の少ないわき水を汲み、炭でろ過して、鍋にボールを浮かべ、ふたを冷やして、水滴を集めた。

字はまだ読めなかったが、挿し絵と道具を見て想像したのだ。

「頭の回転のはやい子だ」

と、叔父のゲウムは思うのだった。何しろ、具体的に教えなくても、出来てしまったのだから。

だが、ニニーにとっては、当然だった。

「グリーンさまは、手も口も出さず、ただ隣にいてくれる。私は私がやるべきことに集中しないと」

あたたかいグリーンさまからの愛を感じながら、ニニーは、日々を過ぎていくのだった。

その頃のニニーは、約束通り、月に一度は、母のもとへと帰っていた。

母のピメレアは、帰るたびに、サンサーリンの焼き菓子を用意してくれるのだ。

「ママ、私も手伝うわ！」

家に帰ると、ニニーは、ピメレアの家事をよく手伝った。

「まあ、ニニー。そんなに頑張らなくていいのよ。いつも魔女修行で大変なのだから、休んでいてもいいのに」

「大丈夫よ！ 別に、ゲウム叔父様は人使いが荒いってわけじゃないもの。それより、この家に一人で住んでいるママのほうが心配！」

そう言って、ニニーは、頬を膨らませるのだった。

「ゲウム叔父様はひどいわ。私の事をだまして箒に乗せて。あれがなかったら、私は今でも、ママと一緒にいられたのに」

「ニニーは、ゲウム兄さまを憎んでいるの？」

「そりゃ、そうよ！ ずっとママのところに居て、歌手の修行をもっとしたかった！」

ピメレアは、一瞬悩んでから、ニニーを自分の膝に乗せた。

「おいで、ニニー」

「どうしたの、ママ。私、もう大きいのよ？」

「ママはね、あなたの歌手としての才能を信じているわ。でも……魔女としての才能もあると思うの」

ニニーは、首を傾げた。

「ママもね、ニニーを縛っていたと思うのよ」

「どうして？」

「歌手になってほしいと願ってしまった。ニニーには、自分で選ぶ自由があるのに。歌手でも、魔女でも、ニニーは、何にでもなれるのに。ニニーの道を奪って、自分の子どもで居続けてくれるために家に閉じ込めようとしていたの……」

ニニーは、何と言っているかわからなくなった。母のピメレアは、真剣な口調で、自分の過ちを反省しているようなのだ。そんな時に、口を挟めるものではない。

「ねえ、ニニー。親ってというのはね、前に言った通り、万能じゃないわ。でも、子どもの

可能性をつぶすようなことだけは、してはいけない。だから……ゲウム兄さんにも、感謝しないとね。あなたに、魔女という選択肢を与えてくれた。この小さな家に閉じ込められているときには、できなかったような経験を沢山与えてくれたのだから」

ピメレアは、ニニーをぎゅっと抱きしめる。

ニニーにとっては、ゲウム叔父さんは、そこまで憎しみの対照ではない。

今まで、「ママが、ゲウム叔父さんのことを怒っているから」という理由もあって、母の前ではゲウムを嫌うような言動を増やしていた。子どもは、親が喜ぶような演技もするものだ。だが、ニニーは思っていた。「実は、そこまでゲウム叔父さんが嫌いじゃない」と。魔女修行は、大変なときもあるが、色々な経験をさせてくれているのは確かだったからだ。

ピメレアの膝のうえに座るニニーが、ぎゅっと、ピメレアを抱きしめ返した。

今まで、母であるピメレアは絶対だと思っていた。間違えることなんて一つもなくて、いつだって立派な人だと思っていた。でも、ピメレアにも、弱いところがあった。

——だったら、私も、ママを助けてあげなきゃ！

そう思った瞬間、幼いころの母との対話を思い出す。たしかあれは、グリーン様に関する話をしたときのことだった。

——親になったからってすごい人になれるわけではなくて、ただの人なの。

——ニニーも、いつか私の小さくなった背中を見て、「頑張ってきたね！」という気持ちになってくれたら嬉しいわ。

——グリーンさまも、なんでもできるわけじゃない。隣にいて、何も言わないけれど、いてくれるだけで安心する存在……。

ニニーは、もう一度、グリーンさまのことが分かったような気がしたのだ。

そして、母・ピメレアのことも。

それは、ニニーにとって、「成長」と呼ぶには勿体ないほど、大きな気づきだったかもしれない。

そうして魔女修行を続けて、十三歳になった年。

ニニーとエンジュの二人は、部下を持つことになった。ハーブの利用方法などの知識も得たので、これからは、雑務は部下にお願いして、ニニーとエンジュは、一段難しい魔女修行に励むことになったのだ。

「私はニニー！ あなたたちは？」

エンジュと初めて会った時のように、ニニーは聞いた。

「僕はイイギリ。結構しっかり仕事ができますと思います。ニニー様の役に立てるようにがんばります！」

「『様』だなんて、やめてよ。同い年なんでしょう？ 呼び捨てでいいわ！」

「わ、わかりました……」

「そっちの、あなたは？」

「俺？ ウツギってんだ。魔女の下っ端やるより、剣の練習とかしてたいんだけどな」

「おい、ウツギ！ 失礼だぞ！」

乱暴な言い方をした少年に、イイギリが口を出す。

ニニーは面食らってしまった。ニニーだって、魔女修行の間に、歌の練習もしていたし、寝る間を惜しんで魔女修行をするほど熱心かというところではない。そもそも、睡眠時間はきちんととれ、とゲウム叔父さんには教えられている。

でも、初対面の「上司」であるニニーに、「他のことがやりたい」なんて言うのは、どうなんだろう？

「まあ……とりあえず。この三人で頑張りましょうね、よろしくね」

気を取り直してニニーは、明るく笑って見せた。

3章 教えるって必要なこと？

けれど、この三人の前途は多難だった。

「あの、ニニー。蒸留水の作り方を教えてほしいんだけど」

真面目なイイギリにそう言われても、ニニーは首をかしげるだけだった。

「教える？ どうして、そんなのが必要なの？」

「えっ。どうして、必要じゃないと思ったの？」

「だって、本でも読めば分かるじゃない。あ、いけない！ ゲウム叔父さんと箒の練習の時間だ！」

そう言って、ニニーはゲウムのもとへ走って行ってしまった。

一事が万事、この調子である。ニニーは、自分が「教え」られなくても、何でもできるタイプだったからこそ、「教える」必要があるなんて、理解できなかった。

「ど、どうしよう」

真面目なイイギリは、ニニーの部屋から本を見つけて、独学で蒸留水作りを学ぶようになった。

「へへ。なら、俺も好きなようにしようっと」

体を鍛えるのが何よりも好きなウツギは、その間に剣の稽古をするようになったのだった。三人は、もうすでにバラバラになっていた。

「ニニー、エンジュ。今日から一週間で、二百個分の蒸留水を作ってください」

ある日、突然、ゲウムがそう言った。ニニーは、目を見張って大声を出してしまった。

「二百個！？ そんな数、一人で作れるわけないわ！」

「部下たちがいるだろう？ ニニーにも、エンジュにも、部下を手配したんだ。三人なら、蒸留水二百個は簡単なはずだよ」

そう言って、ゲウムは早々に部屋を出た。

ニニーは困ってしまった。何しろ、今までちゃんとイイギリとウツギに教えてこなかったんだから。

「ニニー。僕も、手伝うよ」

「別に、俺様もちょっとならやってもいいぞ」

イイギリとウツギはそう声をかけてくれたが、ニニーは断った。

「教える時間のほうが無駄だもん。大丈夫、私ひとりできる」

そう言って、徹夜で二百個をつくったが.....。

「ニニー。君は不合格だ」

目の下に大きなクマを作ったニニーは、試験で落とされてしまった。

「エンジュ。よくやったな。持続性もあり、水もきちんと濾過されている」

「叔父さん、どうして！」

エンジュを褒めるゲウムをみて、ニニーは叫んでしまった。

「私の蒸留水は完璧なはずなのに！」

「ニニー。君のは、エンジュ『たち』が作ったものほど、持続性がない。水もきれいじゃない。そんなものは使えない」

ニニーは混乱してしまった。

今まで、ニニーの人生は、割合、上手く行っていた。

魔法の修行をしなくても箒に乗っていたし、歌も上手かったし、叔父さんのゲウムは国の重役だ。それなのに、ニニーは合格できなかったのだ。

「ニニー。もっと僕らのことも頼ってよ。蒸留水の作り方、教えられなくても、一生懸命、勉強したんだよ」

「でも、私ほど、うまくは出来ないでしょ」

ニニーは、イイギリの言葉を、そうバッサリ切り捨ててしまった。

「おい、ニニー！　いくら上司だからって、その言い方はなんだよ！」

「なによ、ウツギ。私、間違っただけは言っていないわ」

「教えられてないんだから、上手くできるわけないだろ」

「わたしはわたしがやりたいようにやる。イイギリもウツギもしたいようにやればいいわ。やりたいことをやらせるのが、わたしの方針なもの！」

先回りして解決したり、干渉するのは、違う、とニニーは思ったのだ。

だが、ニニーの言葉に、イイギリが慌てて言葉を添える。

「ニニーは強くて優秀だから自力でできるけど、弱くて不出来な人は聞きやすい環境を整えないと分からないもんだよ」

「なんだよ、それ！　俺が弱くてマヌケだって言いたいのか！」

ウツギはそう言って、さらに激昂する。

「だって、私は教えられなくても出来たもの！　叔父様に何も言われなくても、完璧な蒸留水が作れたもの！」

「完璧だって？　試験に落ちた癖に！」

「なんですって！」

言い争う二人は、どんどんヒートアップしてしまった。

「ま、待ってよ。二人とも」

イイギリが止めようとするが、ウツギは、口論のすえに、ニニーを本棚に突き飛ばしてしまった。厚い本が落ちてニニーの頭を直撃し、ニニーは、血を流して意識を失ってしまったのだった。

4章 間違えるということ

目が覚めると、ニニーは、エンジュの部屋のベッドに寝かされていた。

「いたっ」

「ニニー、急に起きちゃだめだよ。ほら、もう一度、横になって」

隣にいたのは、エンジュだ。額には、冷たい布が置かれている。薬草の匂いがするのは、頭に包帯を巻かれているらしい。

「私.....どうしたんだっけ」

「ウツギと喧嘩して、頭に大きな本が落ちて来たんだよ。二時間も目が覚めなかったから心配したんだから」

「そっかあ.....ごめんなさい」

ニニーは、しゅんとしてしまった。

試験には落ちるし、喧嘩もするし、散々だ。

「ねえ、エンジュ。あなたも、部下が二人いたのよね。その二人には、蒸留水の作り方を教えたの？」

「もちろん！」

「水はどこから汲んでいたの？ 私は山奥の湧水をとってきたけれど、イイギリとウツギには遠すぎるのよ」

「それは.....」

エンジュは、困惑した顔で黙ってしまった。

「ごめんなさい。そうよね、ライバルなんだから教えてくれるわけないわよね.....」

「.....。すぐそばの川だよ」

寂しそうにするニニーに、エンジュは、そう声をかけた。

「ええっ！？ 小魚が泳いでいるし、藻が浮いているでしょう？」

「うん。だから、きれいな布でこしてから、濾過するんだ」

「でもやっぱり、生き物がいた水は清浄ではないでしょ？」

「清さを好む小魚が住める水はきれいだよ」

エンジュの言葉に、ニニーはびっくりしてしまった。

「突き詰めて完璧目指しても量はつくれない。最低限の品質で量産するのが試験の課題じゃないからね」

「私、沢山、間違えたのね」

ふう、とため息をつく。グリーンさまは、手を出さずに見守ってくれている。今の自分のことも、見守ってくれているのだと思うと、幼いニニーは、恥ずかしいような、ありがたいような、複雑な気持ちになった。

「イイギリとウツギを頼らなかった。遠くまで湧水を取りに行くなんてしないで、近くの川の水を使えばいいのに、それもしなかった……」

「これからだよ。どんな人も、何度も間違えるものだから。これから、変わっていけばいいんだ」

「エンジュ、あなた、良い人ね」

ニニーがそう言うと、エンジュはクスッと笑った。

「僕ら、ちゃんと話したの、初めてだね」

「ええ。これからは私、エンジュともちゃんと話したいわ！」

そう言ってニニーがエンジュの手をつかむと、エンジュも笑ってくれた。

だが、その顔が、すぐに曇る。

「どうしたの？ やっぱり、嫌だった？」

「……ニニー。ウツギを助けに行ってあげて」

「えっ？」

助けるだなんて。一体どういうことだろう。

困惑するニニーの手をつかんで、エンジュは外に出た。

そこには、鞭で打たれているウツギがいたのだ。

5章 罪を背負うということ

「ウツギ！ どうして！」

駆け寄ろうとしたが、ゲウムに肩をつかまれる。

「叔父さん。どうしてウツギに酷いことをするの！」

「上司に怪我をさせたからだよ。むち打ち百回は、当然だろう」

「そんな……！」

ニニーの目に、涙がたまる。エンジュも、悲しい目でニニーを見た。

「ニニーが起きるまで二時間かかったって言ったでしょう？ その間に、ウツギに罰を与えることが決まって……」

「私がいけなかったの！ 自分のことだけ考えて、部下に教えなかったわたしが間違ってたの。今度はちゃんと教えるから！ お願い、ウツギを助けて！」

泣き出してしまったニニーをみて、鞭を打たれていたウツギが顔を上げる。

「……ニニー。おれのこと、大事にしてくれるんだな」

「え……？」

「おれには、関心がないと思っていたよ」

そう言って、ウツギはむち打ち職人を見上げて、叫ぶ。

「俺は俺の罪を償う。100 打ってくれ！」

「ウツギ、そんな！」

「大丈夫だ。俺、ニニーの部下なのに、さぼって体を鍛えてたからさ……。ウツ！」

また、鞭がウツギの背中に落ちた。

その場から目をそらそうとしたニニーの方を、ゲウムが掴む。

「この事態を引き起こしたのは、ニニー、君だよ」

「ゲウム叔父さん、そうだけれど……」

「罪を自覚しなさい。それが、君に必要なことだ」

ニニーは泣きながら、小さく歌を口ずさみ始めた。

マグノリアがグリーンさまに呼び掛けた祈りの歌だ。初めはつぶやくように小さな声で、だんだん全身で祈るように身体中を響かせて歌い続けた。

周りにいた人々が、「美しい」と次々に感嘆の声を上げる。

だが、ゲウムは冷静に告げた。
「お前は魔女だ。歌手には、なれないよ」
「.....叔父様」
「好きなことを押し通しても、歌手になれない。見習いとはいえ使命を帯びた魔女であり、権限と任務を持っているのだから。その証拠に、お前の部下は今、鞭を打たれている」
三十、という声が、むち打ち職人の口から漏れる。
ウツギは、もう限界だ、というように体がかがめた。だが、まだむち打ちは続いている。

「王が王をやめられないように、魔女は魔女を勝手にやめられないのだ。生涯国のために尽くす義務がある」
「それが才能を持ったものの責務だというの？」
「そうだ。魔女や魔法使いをやめるときは死ぬときだ。それまでは、公務を引退しても、村や町で人に尽くすんだ」
グリーン教は、受け持った人が魂を育てるまで神は新生できないと考える。だから自分を極めたら、周りを助けなければならない。

最悪、新生が間に合わず、世界そのものである神の体が古びて、ともに消滅するからだ。
「私は、私が楽しめればいいと思ってたんだと思います。だから、イイギリとウツギを、どうしたらいいか分からなかった.....」
「そうだな.....」
「だから、ゲウム叔父さんは、試験をしたんですね。注意をしたり、叱ったりしただけでは、反抗するだけで話を聞かなかっただろう、と思って。叱られたから魔女をやめます、とでも言うかもしれないと思って」
ゲウムは、改めて、ニニーは頭がいい、と思う。
何も言わずとも、ここまで理解しているのだから。

「試験で、完全に任されたからこそ、私は自分の罪と責任を自覚した.....。「すべての問題は自分が引き起こしたことであり、結果責任からは逃れられない」ということを.....」
ニニーの目から、涙がこぼれる。
六十、という声が、鞭打ち職人の口からこぼれた。ウツギは、もう失神しそうだ。
「ウツギが鞭打たれることで罪を償うように、私も、部下を導き育てることでしか鞭打たせる状況を作った罪を償えない。わたしの代わりは、いない。私は、魔女になるしかない.....」

イイギリが、そばにきて、ニニーを見守っている。エンジュも、ぎゅっとニニーの手を握ってくれた。

「これで、最後だ。百！」

鞭打ち職人の声が響く。

その時、人々は神の旋律が流れるのを聞いた。グリーンさまが懺悔の祈りを聞き届けて声をかけてくださったのだ。

ニニーも、理解した。

もう歌手への未練はない。

魔女として生きよう。

それが、自分の運命なのだ、と。

それに、ニニーは「理解」していた。

——グリーンさまは、見守ってくれる。だから、自分がやるべきことに集中しよう。

それを「理解」しているからこそ、ニニーは、新しい道へと進むことができたのだ。

6章 いざ、再試験へ

蒸留水の再試験は、それからすぐに行われた。

ウツギの背中への傷は治っていなかったが、前より精力的に働いてくれるようになっていた。とはいえ、繊細な作業や、集中力が必要なことが苦手なようだった。

ニニーは、考えた末に、分業制にすることにした。

ウツギには、水汲みや、濾過をお願いする。

イイギリには、蒸留だけをお願いする。

そしてニニーが、在庫管理や検品や進行の指示を行う、としたのだ。

「作業を細分化させて1つのことだけやらせる話はガールナルミスの工場と一緒だね。僕は悪くないと思うよ」

穏やかなエンジュは何をいっても否定しない。ニニー達のことも、そう言って褒めてくれたのだ。

だが、再試験の日、水を運んでいたウツギがよろめいて、出来上がった蒸留水のピンを割ってしまった。

「ニニー、ごめん！ 俺はまた……」

落ち込むウツギに、ニニーは明るく声をかける。

「だ、大丈夫よ、きっと！」

とはいえ、解決策は思い浮かばない。ニニーは、誰かに頼ることが苦手だった。自分一人のほうがうまくできてしまうし、頼って迷惑だと思われたらどうしようとも思ってしまうのだ。

だが、この再試験も失敗したら、ウツギは「自分のせいだ」と落ち込むだろう。

「エンジュ、お願い、手伝ってほしいの！」

ニニーは、勇気を出してそう言った。エンジュは、微笑んだ。その言葉を、待っていたというように。

「ニニー。君もようやく、協力することの大切さを学んだね」と。

7章 母の死

事態が動いたのは、年が明けてすぐのことだった。

「ママ、ニニーよ！ 帰って来たわよ！」

ゲウム叔父さんから、帰省の許可が下りたのだ。

魔女になる決意をしたニニーは、更なる権限を求めて出世するため、見習いから一人前の魔女になるための試験を受けることにしたのだ。その報告のためにも、母に会いたかった。

「ママ？ いないの？」

だが、懐かしい家からは、返事が返ってこない。

月に一度の里帰りは、ニニーの数少ない楽しみだったが、先月までは、沢山のお菓子を作って、母のピメレアは待っていてくれたのに。

机の上には、ニニーの好きなサンサリーンの甘い焼き菓子用の小麦粉などが並んでいる。いつもは、ニニーが帰ってくる前に、焼き終わっているのに。

「ママったら、どうしたのかしら」

そう言って階段をのぼったニニーは、母の寝室で、声を失った。

「.....ママ！」

ピメレアは、ベッドの横に倒れていた。ニニーが小さなころによく遊んでいた玩具を、握ったまま。きっと、ニニーに見せようと思って二階に上がってきたところで、何かの病気で倒れてしまったのだろう。

「ママ、起きて！ お医者さんを呼ぶわ！」

そう言ってピメレアの体を起こそうとしたが、触れた瞬間、あまりの冷たさに、手を引っ込めてしまった。

「.....そんな.....！」

ピメレアは、もう、息をしていなかった。

呼ぶべきは医者ではない。葬儀屋だ。

「ママ。好きよ。大好きよ。私を産んでくれて.....ありがとう」

ニニーは、そう言ってピメレアの手を握り、ぼろぼろと涙をこぼし、嗚咽するのだった。

ニニーは、悲しかった。いつだって、ただ隣にいてくれて見守ってくれる人。それが母だったのだから。母の愛に包まれる子ども時代が終わり、ニニーは、新しい旅路へと踏み出さなければいけないのだ。

マグノリアの娘であり、ニニーの母であるピメレアの亡骸は、共同墓地に葬られた。
ピメレアの兄であるゲウムも、蒼白な顔で葬儀にかけつけた。
「もっと頻繁に、ニニーを里帰りさせればよかったですか……」
そうも思ったが、ニニーの魔女修行のためには、じっくりとゲウムの家に腰を据える
ことが必要だった。

家族だけで葬儀を行い、骨がおさめられ、みんなが帰っても、ニニーは墓の前から動
けなかった。
「ニニー。風邪をひいてしまう。家に入ろう」
「ゲウム叔父さん。少しだけ一人にして。まだ、ママの側にいたい」
さすがのゲウムも、その言葉に抗うことはできなかった。

ニニーは一人、雨に打たれ、手足はすっかり冷えてしまった。
「……あれ？」
不意に風が弱まった。朝から続く雨も、弱まっている。
振り向くと背後に人が立っている。見知らぬ長髪の老人だった。
「あなたは……？」
老人は、髪も肌も白く、エルメダーラ王国出身者であることがうかがい知れた。
「これをあげよう」
そう言って、老人は包みを差し出した。
「え……？」
「この日記帳には、この世の秘密にたどり着く方法が書かれている。その目で見ると
いい」
ニニーは目を見張る。包みを開けると、本型の日記帳があった。
本だ！ しかも、この世界の秘密にたどり着く本だなんて！
「ママ、見て！ 新しい本だよ！」
そう言って、いつもピメレアがいる背後を振り向いたが、そこには、墓標があるだけ
だった。涙が溢れてしまう。一番話したい母は、もういないのだ。

8章 精神世界での対話

日記帳を読んだのは、気持ちが落ち着いたころだった。
書いたのは祖父のマグノリアで、精神世界に行く方法が書かれていた。
満月の夜に、魔方陣の中心で、一定の呼吸を繰り返すと行けるらしい。
「たしか、バニラ王子の結婚相手を選ぶ舞踏会の夜が、満月よね。その日だったら、お祝いで仕事も休みだし、試せるかもしれない……」
ニニーはそうして、バニラ王子の舞踏会にはいかずに、森にこもったのだった。

気がつくとニニーは、晴れ渡る青空の広がる世界にいた。
現実と違うのは、足元が雲でできていることだ。
そして目の前には、大きなダイヤモンドが輝いている。人の背丈ほどもある大きなダイヤだ。
そのそばに見慣れぬ風貌の魔女がいた。
渡された日記に出てきた、『リリー』というガールナルミスの魔女だろうか？

ニニーが見つめていると、魔女も、ニニーに気づいたようだ。
「ああ、あなたは……もしかしてマグノリアの孫？ 『約束の子ども』？」
「『約束の子ども』が何かはわからないけれど……。わたしはニニー。マグノリアの孫よ」
物おじせずに答えるニニーに、魔女は好印象を持ったようだ。
「そう……。ようやく出会えたわね。私はリリー」
「じゃあ、やっぱり日記に出て来た……」
「ええ。でも、まずは、見てきなさい。これを飲んでダイヤモンドに触れて」
リリーは、水晶の器に液体を注ぐと、ニニーに手渡す。

何が起きるか、ニニーは日記で読んで知っていた。
言うとおりにすると、ニニーの意識は、地上を離れていく。
川を越え、山を越え、空を越え、どんどん上昇していく。
「……書いてあった通りだわ」
そして不意に、真っ暗になった。

「ここが、宇宙の果て。グリーンさまの体の外の虚無ね……」
振り返ると、闇に浮かぶ、巨大な緑のぞうりむしのような生き物が見えた。祝福の旋律の時に微かに感じた思念が強烈に流れ込んできた。

『思う通りにやりなさい。喜びも痛みも分かちあいましょう』

どこかから、そう声が聞こえる。それは、声帯を震わせた人間の声ではなかった。

不意に、視線を虚無に向ける。虚無は距離をどんどん縮め、グリーンさまの輪郭をくっつけた。

内と外が反転して、中心に点と存在するグリーンさまの周りに豊かな宇宙が広がった。

世界は開かれ、広がっている。

——生きている。

——変化し続けている。

圧倒的な歓喜に包まれて、ニニーは、思わず祭典の歌を口ずさんだ。

するとグリーンさまが答えるかのようにリズムを刻んで脈打った。そして祝福の旋律が聞こえた。ニニーは、その時、心から誓願した。

「グリーンさま。あなたのために、尽くします……。これまで以上に……」

その声には、ニニーの感情のすべてが詰まっていた。

「つまり、自由を、自力で暮らせない人にまで認めたために、ガールナルミスは衰退したのですね？」

グリーンさまとの邂逅のあと、ニニーはリリーの話しを聞いていた。

「ええ。そうよ。本来、自由は自力で勝ち取るものであり、与えるのは間違いだったのでも、一度与えられたものを、今さら奪うのは難しいわ」

「そうですね……」

リリーの話は、示唆的だった。この世界をどうしたらいいのかを、ニニーは考え続ける。

「でも、才能で仕事が決まるエルメダーラ王国なら、違う道を選べるかもしれないですよね？」

「ええ。そうよ。その道を作るために選ばれた『約束の子ども』が、マグノリアの孫のニニー、つまり、あなたなの」

リリーが、そう言って微笑む。

自分のすべきことが、理解できた気がした。

「どんなに困難な道でも、グリーンさまのためになるならばやりとげて見せよう」

魔女になる決意をし、母を亡くしたニニーが、新しい道を決めた瞬間だったのだ。

9章 辺境へ行こう

それから時が過ぎ、ニニーは、辺境に旅立つために、用意をし始めた。

イイギリとウツギは解雇しようと思ったが、

「同じ間違いを繰り返すのか？ 俺たちが必要だろ」

と言われて、苦笑してしまった。

二人は、ニニーについていくことを決意していたのだ。

もちろん、ウツギは、

「主席のニニーが辺境に行くなんて！」

と、文句を言ったが。

「辺境使いは、山奥の村の運営ができるでしょう。だからこどもの教育改革がしたいの。

衣食住を平等に整え、好きなものはお手伝いして稼ぐ仕組みを作りたい」

「どういうことだ？」

「教えられなくても、自分で気づいて動ける子どもは街に送り出し、金を稼いでもらう。

教えないと動けない子どもは、村を守る一員に育てる。そういう実験がしたいのよ」

困ったようにウツギが頭をかきだす。

ウツギには、少し難しい話だったかもしれない。

「俺にはいいのか、わるいのか、わからねえ。でも、それには、俺みたいな体力のあるやつが必要だろうな」

「そうよ。わたしの部下になったことが、そもそも貧乏くじとあきらめてついてきて」

ガハハとウツギが爆笑する。

「そこまでお願いされたら断れねえよ。行ってやるよ」

「うん！」

そうして、ニニー達一行は、旅立つことになったのだ。

ゲウムも、意外と寛容だった。

「破天荒なニニーには宮殿は窮屈だろう。小さな村の方が動きやすい」

そして重々しい口調で告げるのだ。

「ニニーの実験が成功して、村が繁栄すれば全国に広めることになる。その陣頭指揮をとるのはニニーだ。だが失敗して村を潰せば、死が待ってる。それでもやるのか？」

ニニーには、勿論、もう迷いはない。やるべきことは、あの精神世界で理解したのだから。

「もちろんです。私、頑張ります！」

こうして、ニニーの人生をかけた勝負が始まったのだった。

トゥンリリス小説リライト「魔女と王さま」(中章)

著 ELYE

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
